

【事例報告】 山田・嘉穂地域の皆さまに親しまれる

新たな神楽“弥栄神楽座”

射手引神社 神職 桑野 隆夫氏

こんにちは、弥栄神楽座を立ち上げました、射手引神社神主の桑野と申します。

私は神主をしています話すが話すが苦手で話すのは地獄です。10分ばかり我慢していただければと思います。

弥栄神楽座ですが、地域に根差して受け継がれる神楽となる事を願って平成26年10月に旗揚げをしました。平成27年5月17日に射手引神社にて初奉納をしてから5年くらい経ちます。

新しい神楽を何故始めようと思ったかといいますと、経緯は“山田”というところですが、射手引神社があるところは嘉麻市というところですが、福岡県の中心に位置し、昔は炭鉱で栄えた地域でした。今はシャッター通り、過疎化といった感じで若い人たちが全然いない地域です。私も射手引神社に移り住んで12年目ぐらいになります。神社に入った当時は“本当にどうやって食べていけばいいのか”と、悩んだような地域でした。そこでまず、この地域を何か賑やかなところにすればいいのかなと、始めたことが神社で何か催し物をしようということです。今されているのが地域の有名な人たちに声をかけてその人たちが薦める本、そんなのだったらできるかなと、まず、イベントを神社でやるとか、フリーマーケットをやるとか、灯籠の祭りをやるとかいろんな事をしました。そんなことをするにつれていろんな方と知り合うことができ、その知り合った人の力を得て立ち上げたのが弥栄神楽座になります。

活動状況としては座員が40名、スタッフが10名ほど、毎年新しい神楽を創り続けています。どんなふうになっているかというと地域の人とプロの人が混じってやっている格好です。プロの人はデザインとか音楽を作る人、衣装を作ってくれる人たちで、そういった分野は素人ではなかなか難しいので力を借りてやっています。

5年間活動を続けていくうちにいろいろな神社さん、昨日も飯塚市内の囊祖八幡宮というところで神楽を奉納させていただきました。そういった神社さんのお誘いをいただいたり、嘉麻市の「市報」に創作神楽を取り上げて載せていただいたり、とても良くしていただいております。5月の奉納がメインですが、月に一回くらい何処かの地域でやっていくような活動をしています。寒い時はイベントが少ないのでその時に新しい神楽を創る企画をしています。それが2月、3月ですね、4月は年度初めということで皆さん忙しいので。この期間を利用しながら新しい神楽を創り5月の奉納をやっております。

反省点をということですが、まだ、立ち上げたばかりで反省点らしいことはないのですが、やはり周りからのやらせの例が多く、計画性を持って活動するように心がけないとこれからは大変かな、という感じです。

例えば① イベント依頼をすぐ入れてしまう。

始めたばかりなので声を掛けられると直ぐ“やろう、やろう”となってしまう。仕事は忙しいですが、取り敢えず出てみたらどうかと出てしまう。そのあと自分たちの首を絞めてしまう。準備、練習、全てに負担が多くなって次第に疲れがくるという状況が多いですね。

私たちは素人集団ですので神楽がどんなものか初めは分からなくて、音楽は専門に任せたものだから音楽を作る人だけで何人も居る状態です、また神楽を舞う人も何人も居て、外部の人が10人くらい関わらないと出来ない神楽も沢山あります。結果的に人を集めるということに苦労しているところです。

② 向上意識が高くて、伝承されることを意識して創作をします。

私はこういう神楽を創りたいよという話はするのですが、創り手は“もっとこういうふうにしたい”、“ああいうふうにしたい”というイメージがあって、アイディアが次々と出てきます。しかし出てくるに連れて戦いのような感じでどんどん追加、追加・・・、と5月の奉納の頃は本番当日まで衣装を作っているような、音楽も急遽変えるようなそういう状態が続いています。伝承を意識しているのですが、本来は使い回しができるような衣装を考えないといけないわけですが、それぞれの舞にそれぞれの衣装をひとつずつ作っている状態です。

そこらも反省事項で、楽（がく）も一つひとつが難しいので、これももう少し簡単にみんなが取り組めるようなものにしていく必要があるなど、音楽の担当者とも話しているところです。結果的には伝わっていくものは伝わっていくと思っております。大変ですけど「残していきたい」と思いながらやっていけばいいのかな、と思っています。悪い点も良い点もあります。

ボランティア意識ですけど、大久保先生のお話で“文化ボランティアなのかなあ”と思っております。僕らはボランティアという意識はありませんが、まちの人たちが「ありがとう、まちのために」と言ってくれる。全然まちのためにと思ったことはないのですが、そんなふうに言われると、神楽をやっている人たちも悪い気はしなくて、何か皆のためにやっているのだという気持ちになってくるみたいです。それが反省点に繋がるような、どんどん出てしまうような感じです。

無償ボランティア、有償ボランティアと書いていますが、ほとんどの人が謝礼も何も無しでやっています。有償の方と言うのはプロの方、歌の世界の方だけです。歌の世界でプロとしてやっている方たちや、デザインしてもらった場合、その謝礼としてデザイン料を払っています。ほんのお気持ちですが、そんな形で神楽に関わってもらっています。

お互いに共通の目的に向かって歩いているので、上手くやっていけると思っています。

心掛けていることは、私が“神主”ということと、発起人として“夢を語り続ける”ことに務めるようにしています。

我儘な神主なので、「あれが言うことなら聞いていたら、何か楽しいことが出来るだろう」みたいな感じで皆、付き合ってもらっています。

子どもの神楽に関してはお菓子とかを多数用意したり、終わった後の打ち上げであったり楽しい要素を心掛けています。

役割分担についてですが、役割分担と言うのはやはり人についてくると思います。

仲が良い人、仲が悪い人といういろいろあるかも知れませんが、それぞれ小さなグループ、そういったのができてそれぞれ心地良い空間をつくってもらえるように心掛けています。

その中で職場の話を聞いてくれる人、悩みとかを聞いてくれる人がいればその人の周りに集まって来ます。神楽のことに限らず、神楽の練習中に悩み相談とかしているところもあります。また美術などは、何かをやるとしても誰でも出来るものではありませんので、それは頼れる人に頼っていくことにしています。

惹きつける魅力ある人は、惹きつける何かしらを持っています。そういった人たちにも声を掛けたり、そうするとその人がいろんな人を呼びこんでくれる、といった状態の中で、今、神楽は何とかやっている状態です。

今後の希望、構想ということですが、新しい神楽ですのでいろんな挑戦が出来るかな、と思っています。神楽と言うのは神様と人が楽しむものであると思いますので、本来なら神社でやるのが一番すじなんでしょうけど、神社の起りを考えると、崇敬の対象として山であったり倉であったり、崇敬するための場所として“神社”があると考えます。

実際に神楽をやるべき場所は、大きな岩のそばであったり、海の場合は山であったり川であったりとか、そういった場所でやりたいと思っています。

そう思っていたところ、丁度先月5周年記念事業として新しい神楽を披露しましたが、その時にプロモーションビデオ作ろうと先走りまして、福津のOBさんですけど、海岸で月夜の満月の明かりで、撮ってもらったら、と言うので撮っていただきました。

それがまだ完成していないところです。プロモーションビデオを今後そういった所で作れるといいなと思っています。

目標というのがあります、それは嘉麻市山田を神楽の里に、と考えております。

神楽の里と言われるところは伝統神楽をやっているところがほとんどですが、私たちがやっているような創作神楽というの、伝統芸能師の方から創ってくれというお願いことをやったり、また組合が創られたような神楽がメインです。

私たちのような神楽はほとんどないのではないかなと思います。

私たちは、やりたいことがあります。それは何かというと“創作神楽”です。

新しい神楽が生まれる場所、伝統神楽がある里ではなくて、新しい神楽が生まれる場所としての神楽の里を謳いたいということです。

射手引神社で伝統神楽の人たちが新しい神楽を創ることもあるだろうし、高校のダンス部に神楽をやってみないかと働きかけ、神楽コンテストみたいなものを作って新しい神楽が生まれるというそういったお祭りをしたいと思います。

その新しい神楽が生まれる場所ということで“神楽の里”というのを謳いたいな、という大きな目標がございます。

弥栄神楽座も創作神楽に参加して特別なものとして捉えるのではなく、新しい神楽の一つというような捉え方をしてもらいたい。新しい神楽からさらに新しい神楽へとどんどん生まれ変わって、もしかして100年後本当に伝統神楽と言われるような、例えば、石見神楽とか高千穂神楽とか、そういった新しいと言われるような神楽が嘉麻市から生まれればちょっと夢があるのではないかと、弥栄神楽座のメンバーにもそんな話を時々しております。

地域に根差した神楽と観光神楽の融合ということでやっていますので、神楽は神社でやれる、出来るという考え方もございます。

実はそうじゃなくて、もっと地域と一緒に楽しめるもの、そういった神楽をやっていききたいということで観光神楽という言葉を使わせていただきました。

神主がいるのが弥栄神楽座の起源でございますので、ある程度ないがしろには出来ないと思います。そういった神楽にしたいと思っているわけです。

ご清聴、有難うございました。